

がん治療の「通信簿」が5年生生存率です。乳がんや肝臓がんは診断から5年で降も再発することが珍しくありませんが、多くのがんは5年以降の死亡はまれですから、これが治癒率の目安となります。

国立がん研究センターは9月、全国約50万人のがん患者の5年生生存率を公表しました。2016年1月から「がん登録推進法」に従い、日本でがんと診断されたすべての人のデータは国が一元的に管理しています。今回のデータは、がん治療の中核病院として国が指定する「がん診療連携拠点病院」の院内がん登録データを集計したものです。

今回特に注目されるのは拠点病院などの230施設につ

がん社会 を診る

中川 恵一



イラスト・中村 久美

ステージ別の5年生生存率公表

することはできません。転移があり完治が難しい4期の患者を多く診ている施設ほど低くなり、最も早期の1期の患者ばかりが多い施設で高くなるのは当然だからです。

もっとも公表されたのは治療から5年後に生存している単純な割合ですから、患者に高齢者やがん以外の病気を持つ人が多ければ数字は低くな

全体の5年生生存率では国立がん研究センター中央病院はがん研有明病院をわずかに上回ります。しかし、ステージ別では、1〜4期でがん研有明病院が勝っています。

全体の5年生生存率の差は4期の患者割合の差によるところが大でしょう。各ステージの差も年齢の影響を受けており、2つの病院で実力差はほとんどないといってよいと思います。

いて主要な5つの臓器（胃、大腸、肺、肝臓、乳房）の1〜4期のステージごとに5年生生存率を公表したことです。

これまで拠点病院別の臓器別の5年生生存率は公表され

てきました。しかし全ステージを含む全体の数字であって、ステージ別の生存率は今回が初めてです。臓器別の数字とはいえ、全体の5年生生存率では病院間の実力差を評価

ります。実際、国立がん研究センターも「単純生存率を比較して、その施設の治療の善しあしを論ずることはできません」とクギを刺しています。

このように、現時点では単純な比較は困難ですが、がん登録のデータが病院側の切磋琢磨（せつさたくま）を促し、患者側にとっては病院を適切に選ぶ目安として活用されていくことを願っています。

例えば大腸がんについて、

（東京大学病院准教授）